

古代西洋服飾の変遷について

——復元による研究——

尾 中 明 代
斎 藤 茂

研究の目的

東西両洋の服飾文化を比較研究し服飾と人間生活の意義を明らかにしようとするのがこの研究の目的であり、これが方法として復元により各民族の服飾を通して彼等の実体を掴んでみたいと考えたのである。その範囲としては今回はエジプトとギリシャについて記述することとした。

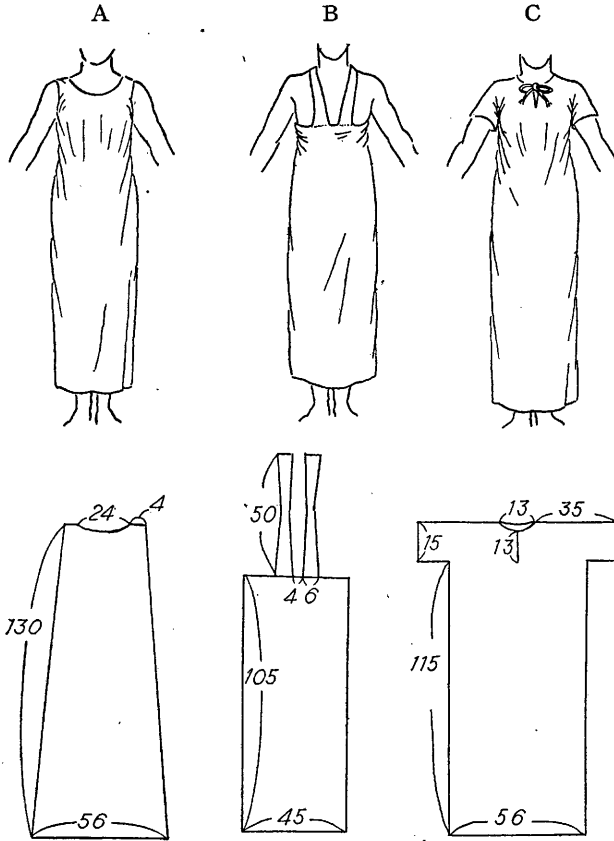
I エジプトの服飾について

概観 古代エジプトの服飾は人類服飾の始まりから後世への発展の間において一つの重要な Epoch をなすものと考ええる。古代エジプト服飾を大別し、第一期は腰巻衣 (Loincloth, Lendenschurz) の時代、第二期に入りカラシリス (Kalasiris) の発展を見たと思う。そしてカラシリスがエジプト服装を代表するものであり、その内容は次の種類である。即ちチュニック型 (Tunic Type)、ローブ型 (Type of the robe)、ペチコートとケープの型 (Type of the petticoat and cape) である。更にドレーパリイ型 (Type of the drapery) がある。元来カラシリスという語はヘロドトス (Herodotus) の書中に見出されたもので、エジプト服装の総称として使はれたと思う。

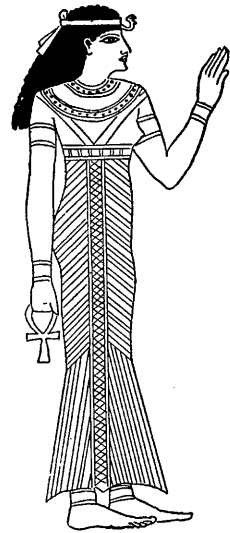
古代エジプトの三時代別 { 古王国時代 (第一～第十王朝, 前 3400～前 2160)
中王国時代 (第十一王朝～第十七王朝, 前 2160～前 1580)
新王国時代 (第十八王朝～第三十王朝, 前 1580～前 525)

ロインクロス (Loin cloth, Lendenschurz) 腰巻衣のことで、古代エジプトでは王にいたるまで用いたが一般には労働階級の者が用いた。ロインクロスとは褌形のものからサロン形のものすべてを含んで言われたもので、左前に合わせ上端では、布端を中に巻きこんでいたが、のちには帯や紐などを用いたものもある。材料は麻や木綿が用いられた。上層身分の者はこの腰巻衣のほかに、肩から体の前後に虎または豹の比較的にせまい毛皮をかける。これは法衣を意味し後世に至るまで形の変化はあつたが、エジプト僧侶の格式を示し最高身分の象徴であり、儀式用の装束であつた。そして各時代を通じ代々の国王はこれを着用したのである。

チュニック (Tunic) 直線的な貫頭衣形式のものである。前 3700 年ごろから用いられていたものであるが、始めは長方形の布の中央に円い衿孔をあげ、脇を縫つて袋状にしたものであつたが、次第にペチコート (スカート) のような形のものや、身頃に続いた半袖



第一図



第二図

のものになった。丈も次第に長いものを着ようになり、女子のものは足首までの長さになった。第一図Aは前3700年ごろのもの、Bは前1700年ごろのもの、Cは前1500年ごろのものであるが、どれも身頃が狭く作られている。材料

は麻が用いられた。始めはごわごわの厚いものであつたが、次第に薄いものが用いられた。

男子も女子と同じような形のチュニックを着たが、男子の場合は丈が短いもので、これに帯をつけている。

第二図はクレオパトラの姿を描いたもので、ウエストラインが胸高の位置になつているスカート風のチュニックを着て、上端に帯をつけている。また非常に美しい装飾のあるカラー (Collar, Kragen) をつけている。衣服のボーダーやカラーなどの模様は刺繍、押し型、描き模様、つづれ織などで、蓮の花の模様が目立つて多く使われている。その他鷹、甲虫、幾何学的な線の図案が多く用いられている。カラーは麻地、白のウール (儀式用) などで、また宝石をつけたものはルビー、サファイア、アレクサンドリアなどが用いられ、五色さんぜんと輝く豪華なものが用いられた。

ローブ (Robe) チュニックから変化したもので身幅は第三図のように広く、袖はついてない。この上に帯をしめると袖口がケーブ式になつて袖のように見える。身頃はタイトに合せて美しいソフトプリーツを出してある。また裾の両脇を丸く切りおとして裾が床に引きずらないような形にしたものもあり、音楽家はよくこのローブを着た。ローブは現在

ロープにサッシュをしめた型



A



B



C

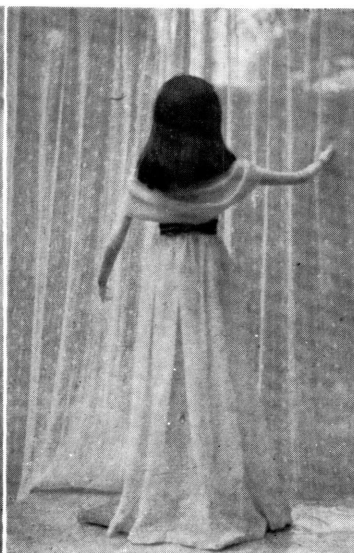


D

ベチコートとケープ型



A



B

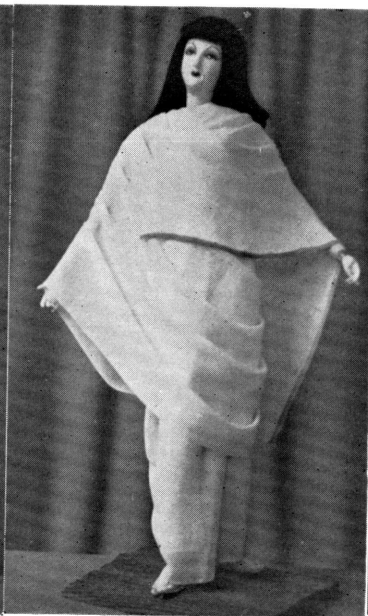


C

ドレイパリー



A

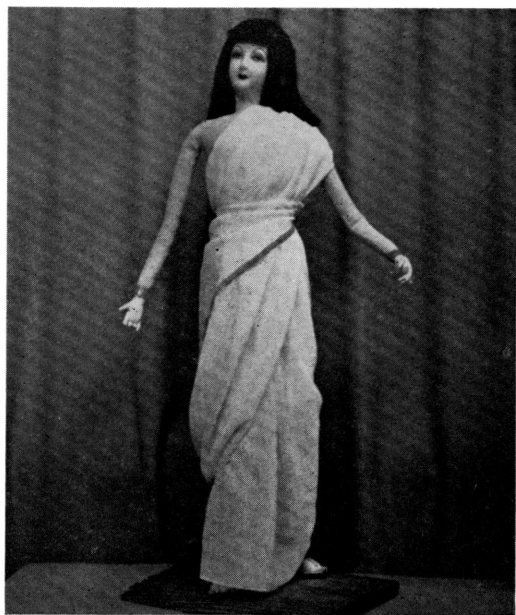


B

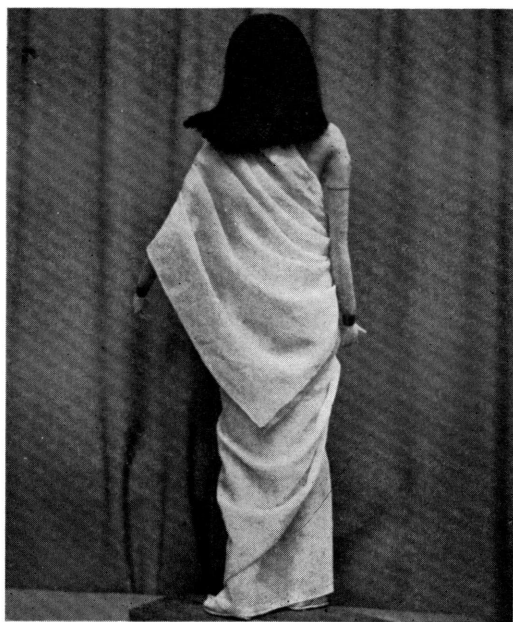


C

サリー



前



後

でもエジプト、シリア及びブラジルの土民が着ている。

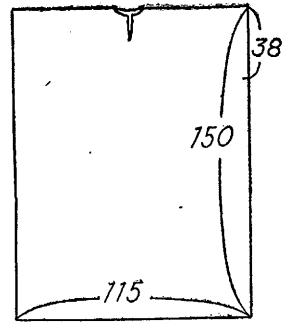
ローブにサッシュ (Sash) をしめた型

第四図はローブにサッシュをしめたもの。第五図は前1450年代のもので上にカラーをつけている。

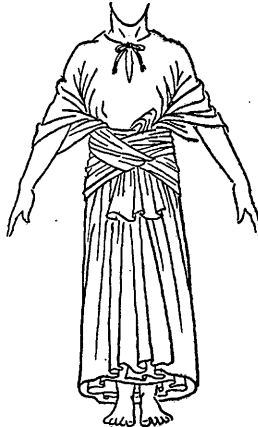
着方は写真のような順序で着る。布の幅はゆきの寸法に、丈は身丈の二倍にとつた長方形の布を丈二つ折りとし、布の中央に衿孔をあけたものを被つて着る(A)。前身頃の両脇の布を後に回して重ね合わせて留めると、前の袖の形ができる(B)。後身頃の両脇の布を前に回して左前に重ね合わせ、後身頃は腰のあたりをタイトにし前に布を余してひだを多くとつて着る(C)。帯は幅 80cm 丈 300cm の幅の広い布にひだをとりながら、脇から後にかけて幅を広くして巻きつけ、最後に前で布の一方の端を引き抜いてしめる(D)。

ベチコートとケープ型 (Petticoat and Cape) ベチコート(スカート)とケープを組み合わせたもので、新王朝の始めに出現した新意匠ですぐれたものと言えよう。時にはベチコートのみでケープをつけないものもある。第六図は新王朝の女王の姿である。材料は透けるようなコス織(麻)或はアモール織の薄地を用いた。裾にフリンジ(Fringe, 房)のあるベチコートとケープ、カラーをつけている。

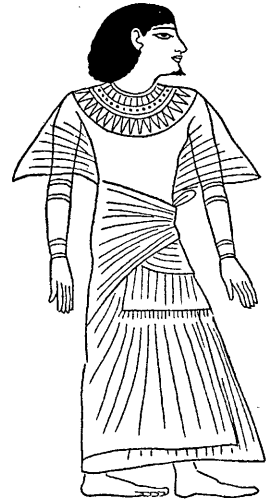
ベチコートは丈100cm、幅225cmのものを筒形に縫い、上部に



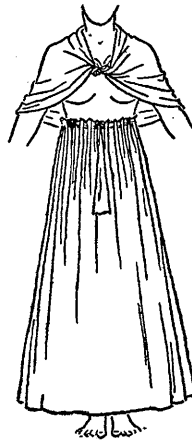
第三図



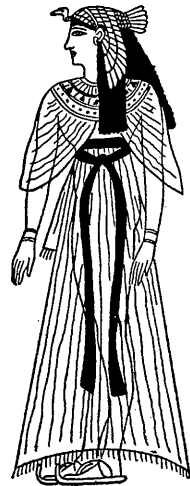
第四図



第五図



第六図





第七図



第八図



第九図

紐を通しギャザーを寄せて着る。ケープは丈 135cm 幅 60cm の長方形の布を肩にかけ、外回りの丈をゆるめて美しいドレイプの線を出して前で結び合わせる。帯は 250cm の長さの黒色を用い、腰を二まわりさせて前で結ぶのであるが、まず前から後に回して、ここで一回結び、さらに前に回して紐文をゆるめて前で結び下げる。カラーは円形で、背を全部あけてボタンで掛け合わせる。

写真Aはペチコートの上に帯

をしめ肩にケープをかけたところ、Bは後の形、Cはケープの上にカラーをつけたところ。

男子が用いた飾り帯は、革に彩色の美しい模様をつけたものや、リネンに羊毛糸で刺繍をしたもの、また金属で模様を隆起させたものなどがあつた。

クローク (Cloak) ペチコートの上などに着る外被である。第七図は前 1450 年代のエジプトの女子がクロークを着用したものを示したものである。ペチコートの着方はいつも後身頃の部分をタイトにし、前に布を余してひだをとるように着る。クロークは布の両端をペチコートの上部の布といつしよに束ねている。第八図はギリシヤ人が着用したのを示したもので、クロークの下に袖のあるチュニックを着ている。第九図は後 200 年代のロー

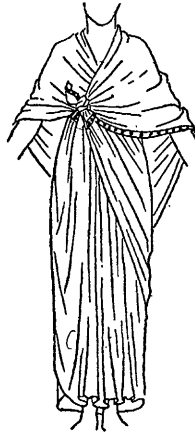
マ人が着たのを示しており、下に長いチュニックを着ている。



第十図



第十一図



第十二図

ドレイパリイ (Drapery) 一幅の長い帯状のもので、日本の比^ひ礼にあたるものである。古代エジプトの墓からは幅 90cm, 丈 900cm のものも発見されている。このショール風の布を巻き方に技巧をこらし、美しいドレイプの線を出して身につけたもので、18~19 王朝ごろに流行した。

現代の印度の服装サリー (Sari) によく似ている。

第十図はドレイパリイをまとい、その上にカラーをつけている尼僧の姿である。第十一図はこのスタイルと同じドレイブの方法を描いたもので、丈の両端にボーダーがついている。

第十二図は前 500 年代のものである。布幅は 115cm, 丈は 400cm で、丈の両端にボーダーがついており、着方は写真の順序で着る。布丈の一方を右脇におき、後に回して一卷きし、さらにもう一卷きしながら左脇から前を斜めに右肩にかける(写真A)。次に背から左肩に回して布端の角を前にもつてくる(写真B)。巻き始めの布端を下から引き出して終りの布端と結び合わせる(写真C)。

参考 下の写真は印度のサリー(Sari)を示したものである。布丈の一方を右脇におき、前から後へ二巻きし、右脇下から前を斜めに左肩にかける。次に背を斜めに右脇下に渡し、さらに前のウエストラインを回して左脇で布の角をとめる。

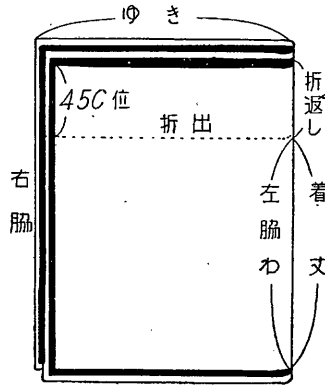
II ギリシャの服飾について

概観 ギリシャ服装の基をなすものはキトン (Chiton) で、前 1200 年～前 600 年頃まで一般に着用されたが、それにはスパルタ (Sparta) を中心とするドリア式キトン (Doric chiton) とアテネ (Athenae) を中心とするイオニア式キトン (Ionic chiton) の兩種がある。(キトンとは今日のドレス Dress と同義語である。) ギリシャの芸術のうち各種の彫刻、花瓶の絵模様などから察するに、ギリシャの服装の推移は緩慢で急激ではなかったことがわかる。次に主要な被服材料は羊毛地と亜麻地であつた。そしてこれ等の資材のうち、羊毛資材はミレトス (Miletus), サモス (Samos) から、またアモル (Amorgos), コス (Kos) 製の高価な織物も直接に原地から導入された。また樹皮製品も贅沢面に利用された。フェニキア (Phoenicia) 産の紫色生地などその例である。又絹の衣服も後期に僅かながら用いられた。元来、ギリシャの古い習慣では衣服の製作は婦人の専業だつたが、後、分業的に機織、裁縫を業とする職人の手に移つた。布の染め出しも進歩し、緑、黄、褐、紅、紫の染色、又各種の模様も考案され、縁飾りの技術も発達した。然し一般には純白の布が用いられ縁だけに色物をつける。この縁附は装飾として主要な技術であつた。その他模様づけ、刺繍の技術も進歩した。これ等の装飾は主にイオニア系の職人によつて行はれた。ドリアン人は軍衣に特殊のコス織や濃紫色の軍服を用いるようになった。古きスパルタは質実そのものでリクルグス (Lykurgus) の規定の中に「スパルタ人にとっては剛健な体軀そのものが何よりの装飾である」とある程であつたが、ペロポネソス (Peloponnessus) 戦 (前 431～404) 後になると、質素な姿は奢侈に変わり極度に贅沢となり、衣服も肉体が透いて見える風のものを男女とも着用するほどに変化した。これがアモルやコスの透し織で、一方には娼婦、笛吹き女、踊り妓などが続々スパルタに流れ込んだと云われる。(冠りもの、頭髮と髯、履物、等についてはここには省略する)。

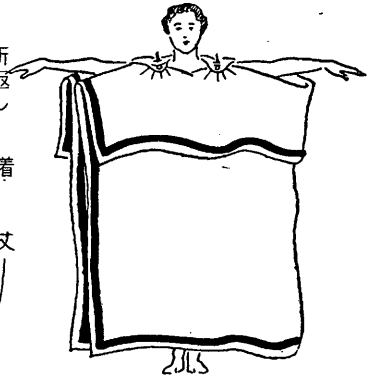
更に笏(シャク)、紫衣、鉢巻について述べるが、それはオリエントと関連があるからである。初期、各 Polis の主権者等はその徽章として笏、鉢巻、紫衣を用いた。ところが後に共和政が広く行われると、上述の徽章はスパルタを除き多くは廃止されたようで



第一図



第二図



第三図

ある。アテネでも特殊な装具は上級官僚でも遠慮して用いなかつた。然し執政 (Archon) は杖 (Stab) 及びミルテの花冠 (Myrthenkranz) を載いた。又元老院, 国民会では議員は演壇に立つ時は花冠を載いたが終れば脱冠した。次に僧侶であるが, 元来ギリシャでは人民宗教のたてまえから特別の僧官はなく, 人民が交代に祭司に当つた。僧服としては白色亜麻のキトンで, ゼウス (Zeus) やアポロ (Apollo) の最高神を祭る時だけ紫衣をつけた。要するに花冠と礼服が神事規定として励行された。

ドリック・キトン (Doric chiton) 第一図は初期のギリシャに於けるキトンでスパルタで多く用いられたドリック・キトンの根本的な形のものである。第二図, 第三図はその着方を示した図である。布幅は両脇をひろげて着用者のひじから, ひじまでの寸法の凡そ二倍にとり, 丈は床までの長さより 45cm ほど長い丈の長方形の布で, この布を肩の高さで折り返して外側にフラップとして垂らす。次に布幅を二つ折とし, 布の輪を体の左脇にして第三図のように身体につけ, 両肩で前後を重ね合わせて金属性のピンで留めるだけのものである。両脇布は自然に垂れ下がり, ドレイブの線ができる。

写真Aは肩で布を折り返したものを身体につけたもの。Bは両肩をピンで留め合わせたもの。Cは脇にできたドレイブの線。

この着方によれば右脇は全く開いたままになっている。このことは彼等が堅固な身体を養うためにも役立った。キトンの材料は毛織物が普通に用いられ, 布の周囲に美しいボーダーが織り込まれるのが常であつた。また着用者の身長に応じて裁断されるのではなく, 織機で織る際に適当な寸法に作られた。前 600 年代には, 地質は薄地になり, 布幅は 300 cm 位の広いものとなり, 従つてひだも多く次第にぜいたくなものとなつた。

第四図は初期のドリック・キトンで前 600 年代のものである。これは身幅が狭くなつており, 左脇は輪になつて右脇が上まで縫い合わされて筒形になつてゐる。これを肩から折り返してフラップを作り, 腰紐で結んでウエストをしめている。

第五図も前 600 年代のものである。これは身幅が広く, 丈も長くなつてゐる。左右の脇



A

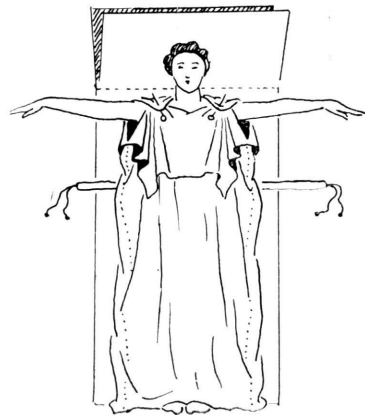
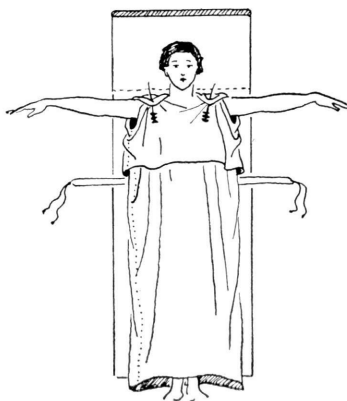


B

↑
→
ド
リ
ッ
ク
・
キ
ト
ン



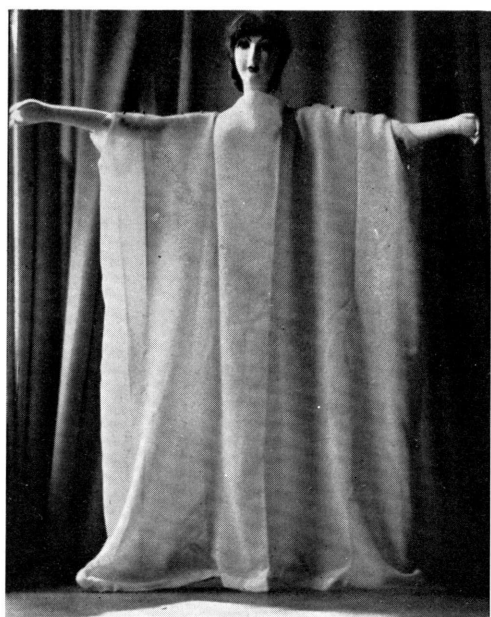
C



第 四 図

第 五 図

イオニック・キトン



A



B



C



D

に縫い目があり、フラップの部分は縫い残されている。着た時の腕の美しさが目立つ形である。着付けの際は脇の方に布をよせ、後で腰の部分タイトにして体の線が表われるようにする。

第六図はドリック・キトンの別の着方であつて、前500年代のものである。これはフラップの布を長くして腰まで垂らし、着丈も長くしてフラップの上から腰

紐をしめ、紐の上に布のたるみを作っている。右脇は縫い合わされていない。このほか右脇を縫い合わせたものもある。

男子は一般に裸に近い姿をしていたといつてよい。衣服を着ても年長者かまたは社会的に重要な地位についている人を除い

ては、一般は単純で粗末なものであつた。第七図は男子がドリック・キトンを着用している図であるが、丈は短く幅はあまり広くない。普通は両肩をピンで留めるが、労働者などは左肩だけを留め、右肩の方はおろして働き易い形にしている。

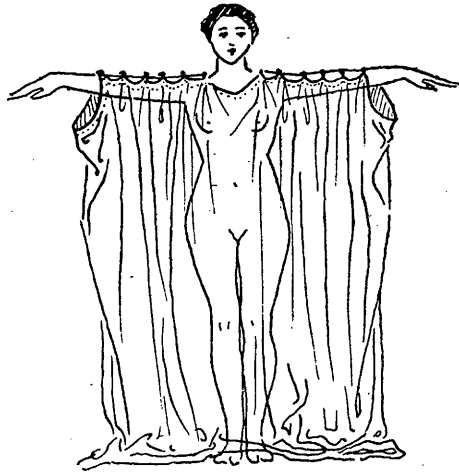
イオニック・キトン (Ionic chiton) ペルシャ戦役後、ドリア婦人はイオニア人の着ているイオニック・キトンをまねるようになり、これが新しい流行の根本となつて前600年代の初期には一般に着用されはじめ、次第にぜいたくなものとなつた。第八図はイオニック・キトンの着方を示したものである。丈は着丈より長くして余裕をつけ、幅は左右の手をひろげて、指先までの二倍の寸法にとる。ドリック・キトンのような上端の折返しはない。これを幅二つ折りにし左脇で縫い合せて筒形のものにする。図のように着て前後の肩山をボタン、またはブローチで留め、上端左右の端を袖口にして、ここから手先を出す。



第六図



第七図



第八図



第九図

肩山はボタンで掛け合わせるほか、のちには縫い留めるようにしたものもある。ドリック・キトンのようなピンは用いていない。ウエストの腰紐をしめて、ウエストにたるみを作り、ギャザーを脇に多くよせるようにして美しいソフトプリーツを出して着る。身幅が広いために、ゆきが長くすべり落ち易いので幅の狭い紐をたすきにあやどり、装飾をかねている。たすきの掛け方には、いろいろあるが写真は前後とも紐を交叉させている。

写真は、肩をボタンで留め、左右の上端から手先を出している(A)。たすきを後のウエストから前に回し、前中央で交叉させ肩にかける(B)。後は肩から下がつた紐を中央で一回ねじつて交叉させ、脇で腰の紐にからげる(C)。脇から前に回し前中央で結び合わせる(D)。

ヒマチオン (Himation) 外被として男子も女子も用いた。一枚の長方形の布を肩から掛けて着る。男子は多く両肩に掛けて前でブローチかボタンで留めたものを着ており、これは後世のマントへ発展して行つたものと思われる。

女子はほとんど袈裟のように肩から斜めに掛けられているが、これにもいろいろな着方がある。第九図は大きいふろしきのような形のもを、図のように左肩をはずして右肩で留めたもので、下に着ている衣服が目立つようにまとっている。

このほか薄地の布を用いてスカーフのように装飾的なものとしてまとつたものもある。

結 び

これは古代に関する研究の一端であり現代とは遊離している感を免れない。然し角度を変えて考えると古代人の服飾感覚といえども、その根底に流れるものは現代と一脈あい通ずものがあり、殊にその自然さにおいて、或はまたデザインの点において現代に一つの示唆をもたらすものではあるまいか。服飾こそは各時代、社会の生活を基とし工夫され発達して、一つの総合芸術の域にまでも到達するものと思う。服飾の美醜ということは各個人の教養の如何に係わる問題であると同時に、更にそれはその時代、社会の美醜を示すバロメーターであると考えらる。

附記 この小篇は昭和 29 年度文部省科学助成費の支給に対する研究報告を兼ねるものである。

参 考 図 書

- Die Trachten der Völker: von Carl Köhler 1871. 本書は東京家政大学の所蔵であり、Max von Boehn の著書と並び称せられる権威書。
 Ancient Egyptian, Assyrian and Persian costumes and decorations: Mary Houston and Florence Hornblower 1920.
 Greek, Roman and Byzantion costumes and decorations: 同上共著。
 Geschichte des Kostümes: Rosanne Leclère 1949.
 Historian's History.
 The Columbia Encyclopedia 1953.
 Encyclopedia Rexikon: Mayer.
 Feeling and Form: S.K. Langer.
 Anthropogeography: F. Ratzel.
 祖父江, 加藤共著: 染料と繊維。
 江馬務著: 世界服装史要。
 八木静一郎著: 西洋服装史。
 飯塚信雄著: 西洋服装史入門。
 今和次郎著: 女性服装史。
 後藤守一著: 図説西洋服装史。
 和辻哲郎著: 風土(人間学的考察)

正 誤 表

頁	箇 所	誤	正
7	附 図 番 号	13 ~ 29	11~27(夫々2づつ繰上げ)
7	参考文献1行目	Tabrikafion	Fabrikation
14	柱	斎 斎	斎 藤
16	柱	藤 藤	斎 藤
16	下より10行目	Rexikon	Lexikon
42	下より3行目	組 識	組 織
45	上より5行目	オルチニン	オルニチン
〃	下より13行目	生化的作用	生化学的作用
46	上より21行目	ア セ ン ト	ア セ ト ン
53	上より6行目	VII	VI